

唐宋時代の首都を中心とした 支那に於ける都市的性格

——ガラスの都市經濟の階段による——

教授 佐伯三郎

一
我が國が今後大陸に發展致しますのには、日本のなものをしつかり把握して置くと同時に、支那的なものを認識して置くことが必要であります。それには横斷的に今日の支那を分析して行くことも一方法ですが、縦斷的に歴史的方法によることもより重要であると考へます。今日の支那は、西洋文化に觸されて複雑な様相を呈してゐますが、歴史的传统的なものを抽出し行くことにすれば、複雑な一面を容易に解きほぐすことが可能ではないかと愚考致します。それには、古代支那から漸次に史的推移を追ふことが必要でせうが、直接近代支那の前置的形態をなしてゐると思はれます。唐宋時代を問題として取り上げますことは、直截的に有意義のことではないかと考へられます。こゝに草しま

す一端は、たとひ經濟史の一面から眺めたものであり、総合的觀察ではないにしても、上述の背景を擔ふものの一断面であり、聊か支那的性格の一部分に觸れるものに非ざるかと考ふる次第であります。

二

さて、標題につき筆を進めると當つて、このやうな問題について興味を持つた直接的な動機となりましたものは、アメリカ・ハーバート大學の商業史教授「An Introduction to Economic History」教授の名著「An Introduction to Economic History」に於ける支那に關する部分に對して一小疑問を生じたからであります。ガラス教授は、非常に特色のある經濟發展階段説をとり、人類の經濟生活の發展を夫々採取經濟時代、農牧移動經濟時代、定居村落經濟時代、都市經濟時代、大都市經濟時代の五階段に分類し、各

大正十一年六月十五日發行
昭和十六年五月十五日發行
昭和十六年五月十五日發行
發行所 關西大學學部
大阪府東區西區
中區二丁目十二番地
甲 印刷所 谷口印刷所
發行所 關西大學學部

第一號
唐宋時代の首都を中心とした支那に於ける都市的性格 佐伯三郎 (一)
中小産業の研究 磯部喜一 (四)
學内報 (六)
校友欄 (七)
昭和十五年度學友會決算報告 (一五)
本學年度學科目擔任表 (一五)
大學の方向 (二〇)
江里口春志 (二〇)

時代の經濟的特徴を各國の例によつて鮮明に述べてありますが、その第四の階梯である都市經濟時代の章に於て「支那に於ては、耶蘇紀元よりも久しき以前に都市が發達してゐた。それが第一回の發達であつたか否かは明ではない、が兎に角今日まで中絶することなしに維續したことは疑ひない。是れ、即ち西歐人の「支那式」停滯なるものであつて、村落程に低からず、さりとて大都市程に高からぬ都市文明が、かうして何時までも引續いてゐる。此の文明は藝術的、道德的には如何に高くとも、物質的と科學的には低いと云はねばならぬ。……かくして、支那は、大都市經濟の手前で停滯し……歐洲人の渡來を待つたわけである。」と述べてゐます。
ガラス教授は支那經濟史に對して如何程の知識を持つてゐたかについては、以上の文章の如く簡單であつてその内容を詳細に窺知し得ませんが、これが果して何の程度に支那經濟史の真相と合致するか推考を要する點ではないかと考へます。
これから、問題を展開致します前提要件として、ガラス教授の都市經濟の具要すべき條件をあげて見ますと、多くの村落の中から、政治的、宗教的、社會的に優越した一村落が、諸村落の核心となつて都市的村

となり、かゝる都市的村落が經濟、特に商業の方面に於てこれに對應した發達をなすとき經濟都市となる。

經濟都市即ち經濟の階段は前後二期に分れ、前期は商業都市であり、後期は商工都市である。而して第一期の階段たる商業都市には獨立の店舗をもつた専門商人が出現し、都市的村落時代の市場の作用を補ふと同時に、市場の競争者となつた商人階級が出現した時より始まり、第二期たる商工都市は、商業都市内に於て從前は都市外の村落によりて作られた物資の製造が、都市居住者の手によつて行はれるに至つて始まつた。

かゝる經濟都市は、前期に於ては、商業の點に於て、近隣村落に優越し、後期に於ては、商業のみならず工業の點に於て、卓越するに至つたと述べてゐます。

三

以上の如き、グラス教授の都市經濟時代を特色づける諸要件を基礎とした支那の説明が、如何なる程度妥當性を持つてゐるか。答案として、支那に於て都市が急速に膨脹しました、唐宋時代の首都を中心とせる都市生活の分析をなすことが必要かと考へられます。勿論支那の都市は、古代より同時代に於ける歐洲の如何なる都市にも遜色なかつたのでありますが、隋代、唐代その首都は世界の一大偉觀でありました。即ち

那波博士の指摘されます通り、唐都長安城は、東洋風の帝王の威嚴を昂め、帝都の壯大を誇る點より云へば、支那に於て空前絶後の大都市であり、世界的に見ても唯一無二の大規模なものであつたのであります。この唐都は、隋の大興城を後に唐が襲用致しましたものであり都市經濟の點より見て、劃期的な轉換が實行されました。

那波博士の考證される所によつて見ますと、支那には古來より傳統的な都市計畫が存し、已に周末漢初には、前朝後市左祖右社中央宮闕左右民庶の考が重要視

されました。前朝後の市の理由は、朝は義のある所、市は利のある所、義を先にし、利を後にす、との思想に基くものであつたのです。而るに隋の大興城、後に唐に襲用された首都長安城は、前朝後市を迹に、宮闕の北に市街を設けず、市を宮皇城の南方臣庶の住宅の一區劃に配置し、傳統的な支那都市計畫に背馳する劃期的現象でありました。これは、何を意味するか。一方には、隋都が進歩的實利的な思想を持つ胡族系の更によつて計畫造營に参加したことによりますが、他方

傳統に背馳せしめる程、支那に於ける都市内外の經濟生活が重要視されるに至つてゐたことを物語るものであります。このことは、前朝後市が、都市住民の實際生活上甚だ不便であつて、從來此の考による都制には繁昌區域は爲政者の理想を無視して宮闕正南門に當る都城の正南城門の内左右に發生發達してゐたことと併せ考へます時、隋、唐の首都の都市經濟的地位が明瞭となつて參ります。

唐都に於て、市を宮皇城の南面に配置したと云つても、市店等の繁昌區域を散居せしめた次第ではなく、宮皇城の正面中央より朱雀大街を通じ、その東西兩側各二坊の區域を限つて、夫々東西西市を設置し、各坊と同様牆を廻らし、四面に各二門を開き、朝夕閉閉し夜の交通を許さず、一定時間を限つて閉市せしめました。この際、市と云ふ名辭に捉はれ、且つそれが、各種の方面より制限された坊制の一區域たる點より考察すれば、唐の首都長安城が、那波博士の言の如く、東洋風の帝王の威嚴を昂め、帝都の壯大を誇る點より云へば、支那に於て空前絶後の都市であり、世界的に見ても唯一無二の大規模のものであり、又グラス教授の言の如く、政治的、社會的、藝術的に、將又その都市の規模に於て、人口に於て如何に優越してゐても、經濟的物質的に於ては低かつたと云はなければならず、

從つて、グラス教授の云はれる如く、都市的村落の域を出でなかつたと云はなければなりません。

こゝに於て、唐都の經濟的性格を知るためには、唐都に於ける市の分析をなし、唐都に於ける制限的な市制度の特性を描出せねばならない譯であります。唐都に於ける市は、古代又は中世の歐洲に存在した市即ち *Forum* や *Forum* と同列に解釋されることは出来ないことは勿論支那古代、日本古代に存在した市とも同列に考へることが許されませぬ。支那に於ても、古代の市は、日を定めて相會し、交易賣買を行ふ所即ち歐洲に於ける *Forum* の如く定期市より、毎日一定の時間相會して交易する *Market* と同様、常に發展したものであります。唐都に於ける「市」は、市と云ふ言葉は形式的には同じであつても、その内容の點に於て、それ等と全く異にするものであります。それは、各種の點より指摘できますが、主要な一二の點をとつて見ても判然となることゝ存じます。

第一に、加藤博士の宋破求の長安誌、その他の原典について考證し説明されますやうに、唐都長安城に於ける、東西市の四面各二門の坊門内部は、坊門を通ずる大路の外に、小路に分れ、之等の大小路には、肉行衣行、靴行、坪行、綳行、藥行、金銀行等の如き、夫々肉屋町、衣服屋町、馬具屋町、坪屋町、藥屋町、金銀商店町等の如く、同業商店相集つて行をなしその數二百二十行もあつて、それ〴〵諸國の珍貨を積み重ねて、四面に軒を連ねてゐました。こゝに於ては、時を定めて、賣手買手が集合し、取引する交易の場所であつたことも、他の方面より推測し得るのであります。主として、自巳の店舗より物を販賣するグラスの所謂都市經濟時代の商店街であつたのであります。故に、次に述ぶる點と併せ考へて、此等を、古代並に歐洲中世の市と同一視することは出来ないものであります。

第二には、唐代、湘縣の如き、比較的大なる都市以外に於ては、唐都に於けるやうな市制度を設けず、民の自由に任じましたが、その場合市の開かれる場所を草市と稱しました。又唐宋時代、時を定めて集合する賣買の場所たる定期市を現はす場合に於ては、「市」に熟語を加へるか、全く別な言葉、例へば、市集、市會、會集、坊場、集物又は場等を以て呼ぶに至りました。以上は何を物語るか。草市と云ひ、市集、市會、會集等の新語は、唐代の兩京、以下の大都市に於ける商店の建て連ねられたる一定の區域即ち商業區域を指す「市」と古代よりの傳統的な單なる交易場としての「市」とを區別する必要が生じたために外ならぬのであります。さすれば、これによつて、唐都の「市」が益々歐洲の傳統的市と同列に見ることを許されず、全く別に考へねばならぬ問題であります。

四

已に掲げました如く、グラスは「都市經濟時代の前期である商業都市時代の要件として、店舗を有する専門商人階級の發生」を以てしてゐます。此の點は、如何でありませうか。前段については已に、唐都東西市の分析を致しました際、觸れた所でありまして、又加藤博士の引用されました宋政求の長安誌には、東市の條に「市内貨財二百二十行、四面立邸、四方珍奇所積云々」西市の條には、「市内店肆如東市之制」とあり、又元河南誌、洛陽南市には四壁に四百四店とあつて、その對文に邸は倉庫を、店は店舗を意味し、屢々通じて用ひられるとある如く、唐都の東西市の邸を倉庫、店を店舗と解して支障なく、従つて唐都の市店が店舗商人であつたことは明白であります。

次に問題となりますものは、後段の専門的商人階級の發生が支那唐代に存したか否かといふ點であります。これも次の諸點によつて、唐代専門的商人階

級が出現したことを證明出來ます。唐代(イ)均田法が布かれてゐたことは御承知の通りであります。その際工商には、寬郷にあつては一般人民に對する給田の半を與へ、狹郷即ち人口稠密で給田不足の地にあつては、受田せしめない規定でありました。(ロ)税法に於て、商賈の田を所有しない者は、九等に分ち下下戸を除き、五斗より五石まで各等に差を附して納付せしめ、市内の商賈には、市籍租を賦課致しました。(ハ)時代が下りますが、兩税法時代に於ては、政府が今日の公債の如き形式の下に殆んど返すことなく借銭し、除陌錢の如き、商人に對する一種の營業税を起し、又閱商買錢を商賈に課しました。之等を綜合致しますと明かに専門商人が存在し、且つそれ等は階級を構成してゐたことが證明されざるを得ないのであります。何となれば、専門的商人なく、且つそれが一階級を構成せざる限り、國民の全階級を律すべき法律稅制の中に特に商賈に對する特令が存する餘地がないからであります。

洋の東西を問はず、古代農耕が經濟生活の根幹を形成してゐた時代には、國家の最高政策は重農主義で、その間に擡頭して來た商業を蔑視し、これを抑へる思想が支配的であつたことは、申すまでもないことあります。而し、歐洲に於ては、中世末に至ると澎湃として立ち上つて來た工商階級が、組合を組織し、都市の政治、文化、宗教を左右するに至り、抑商思想は後退して、重農主義の濶刺たる前進を見ることとなりました。而し、支那に於ては、經濟生活が發展し、商業が生活の重要部門となつた時代に於てさへ、蔑商思想抑商主義が支配的であり、況んや、歐洲に見られる如く工商階級が都市の政治を左右する如きは、支那全史を通じて、清末を除きかつてないことであつたのです。唐代に於ても、支那の特殊性は例外をなさず、都市の内外を通じて、商業が發展し、前述しました多くの商

店が市内に軒を連ね、それ等は獨立の商人階級をなしてゐるまでも、依然として蔑商抑商の傳統に支配されました。此の故に唐都が、前述しましたやうに、支那に於ける空前絶後の大都市で、世界的に見ても唯一無二の大都市であり、玄宗天寶の始めに於ては、戶數三十六萬餘、人口百九十六萬餘を算する一大都市でありましたに不拘一見商業都市たるを疑はしむる諸制限をうけました。

前に少し觸れましたやうに、場所的には、唐都東西二市の各二坊の區域に限定し、商店は原則として此處に設置され、周圍は牆壁を以て廻らし、通行は、四面各二門による外、私門を設けて自由の通行を許さず、時間的には、市門を日没に閉し、天明に開かして、夜間の通行を許さず、營業は午時擊鼓二百を以て開始し日入前三刻擊鼓三百を以て閉店し、夜間の營業を許さず、商人を市籍を有する者に限定し、其他價格、數量品質に關する諸制限は、唐法を模した我國寧樂平安兩京の東西市制によつて推知される等、全く支那の性格の一面を物語るものであります。かゝる過激な制限の例は、歐洲に於てその例を見得ず、従つて、唐代に於ける、市の外部的諸形成たる場所的、時間的の方面に局限して、その内部的構造を等閑視する限り、支那の都市經濟が、唐都に出現しなかつたこととなり、支那の都市が如何に道德的、藝術的に高くとも物質的、經濟的には低かつたと云はねばならぬと云ふ、グラスの見解に陥ること必然であると云はねばなりません。

五

グラス教授は、「經濟都市を發生せしめたそれと同じ條件が亦た都市をして、彼等自身のギルド即ち組合を組織し、都市の政治を左右……する所の専門的商人や製造業者から成る商工社會にまで發達せしめた」と叙述してゐます。已述の如く、唐都の東西市には、

各種の商店が軒を連ね、同業商店町たる行を形成してゐましたが、行はかく、同業商店町であると同時に、同業商店の組合で、歐洲に於けるマーチャント・ギルド、我國中世の座商と同様、共同祭祀、同業者相互の共同利益を計る組合又は團體であつたと考へられます。而して、同業商店の組合たる行には行頭（町役人にして行首、行老とも呼ぶ）が置かれ、公的には、官の警察上の取締、商税、徭役を助ける町長、私的には同業商店町を代表する組合長でありました。右によつてグラスの云ふ専門商人や、製造業者から成る商工ギルドの中、前者たる商業ギルドが、唐都に存在したか否かについては、存在したことが明白であります。

而らば、工業ギルドについては、如何でありませうか。加藤博士は、上述のやうに「行」を同業商店町であると同時に、同業商店の組合と云ふ意義に解されてゐますが、根岸博士は、「行」を同業商店の組合又は團體と解されるのみならず、手工業者の組合又は團體と解されます。根岸博士は唐宋時代の工商組合を分析して、商人と號する者其販賣商品の製造、修繕をなす者少しとせず、手工業者と名付くる者、多くは店舗を構へ、製造すると同時に販賣するが故に、兩者の間明確に分界線を劃すること困難であり、兩者を區別するは單に生産と分配の孰れに重きを置くかによる外なし、只宋時代に至つては「行」は主として商人の團體を指し、手工業者の團體と呼ぶに主として「作」と稱したと云はれてゐます。

この點、鞠氏は更に一步を進めて、「行」を加藤博士の如く、單に商業に關聯せしめて、解釋するのは誤りであつて、「行」本來の性質から云へば、「工業區域」の組織でなければならぬ。その根據は、唐宋時代の工業は、官私に分れ、私工業は、作坊又は坊と稱するのが普通の形式で、それは要は工場であるが表は店舗であ

り、従つて、「行」の單位は商店街ならずして作坊であつた。而して、宋時代に入ると、「行」は單なる區域的組織でなく、同業組織即ち西洋のギルドとなるに至つたと云はれます。

之等三者の説を總觀するに、問題は「行」の解釋如何によつて、或は加藤博士の如く、商業ギルドとなり或は鞠氏の如く、單に工業ギルドとなり、或は根岸博士の如く、商工ギルドとなりますが、結局「文獻上、支那に於て、商工ギルドが明確になつたのは唐代である」と云ふ點に於ては、加藤博士、根岸博士及その他の學者の共に一致する所でありますが故に、他の諸點からも推測して、根岸博士の解釋をとるのが妥當かと考へられます。さすれば、グラスの云ふ手工業者のギルドの中、残された工業ギルドが、唐都に於て存在したことは疑ひ得ないこととなるのであります。グラスは、「都市經濟時代の前期に於ては、都市は先づ商業に於て著名となり、後期に於て、都市に工業が勃興し、商業と共に近隣諸村落に優越し、前期の商業都市は後期に於て商工都市となるに至つた」と、都市經濟の發展の進路を二分してゐます。此の點、支那に於ては如何でありませうか。唐代、首都の商業が、「市」の制度により、その外部的統制拘束を受けた形式的の觀點よりして、或は村落的城市ではないかと云ふ疑點を一掃して、「市」制度の内容を分析して商業都市たるを明にし、それが支那の性格の一形態であることを明確に致しました次第ですが、上述支那のギルドを證明して、唐代已に商業ギルドと相並んで、工業ギルドが私工業に存しました點を明かに致しましたことは、次のことを物語るものであります。支那に於ては商業都市と商工都市とは、グラスの發展階段に於ける如く前後の階段ではなくして、同時的存在であつた。即ち唐代商人が一階級をなし、商業社會たるギルドを組織

中小産業の研究書

——その特異性への關心を昂めよ——

教授 磯部 喜一

現代の國民經濟がその物的生産力の基礎を大工業に求めるとは、豫ねて言はれてゐることであつた。産業革命以後の機械の發達が愈々以て大規模生産を追求してゐる事實を直視すれば、正しく肯かれるのである。だが、同時に、叙上の立言だけではわが國民經濟に就いての説明とはならぬことも亦、注意せねばならぬ。第一次世界大戰後とりわけ躍進したわが國の雜貨輸出は、中小工業をその基盤としてゐる。吾々の主食物を生産してくれる農村は、多數の零細農家を以て構成されてゐる。日支事變の勃發以後豫想を絶した物資の貯水池として世界を驚倒せしめた配給機關は、やはり中小商人が大牛である。

この意味に於いて、國民經濟の構造上世界の大勢としての大産業への關心とわが國の特異性としての中小産業への留意の綜合が、吾々に要請されざるを得なかつた。ところが、戰時經濟が強化せられ、國民經濟の計畫化が愈々眞剣に考慮されるや、右の二様の關心は屢々矛盾的關係に置かれるに至つた。そして如何にしてこの兩者を綜合すべきかが、重要問題になつてきたのである。この時期に新に經商學部に入學した諸君は、この問題を解決すべく運命づけられてゐると、考へられないものでもない。

世上に研究書は多いが、この問題に關する權威ある著述としては、吾々は日本學術振興會の各小委員會の報告に指を屈する。各小委員會の報告は、全國の大學その他の專攻者が數年の歲月と數萬圓の經費を以て調査研究し、更に多數關係者の熱心な討論を経た後の勞作を輯録してゐるのである。既に解散した小賣商問題

するに足る發展をしてゐたと同時に、手工業者も亦工業ギルドを組織するに足る一階級として發展してゐた。そのことは前述した、唐の均田法に於て、明に「工商に一般の人の給田云々」とあるによつても明かであり、また、このことが、何の理由に基くかその原因については、こゝに解明するに足る材料を持つてゐませんが、商業都市と商工都市が支那に於ては同時的存在であつたことは明らかであり、このことが又唐代に於ける都市經濟に對する支那の性格の他の一形態であることは指摘し得たと存じます。

六

以上、唐代唐都を中心とする、都市的性格について分析して見ました次第ですが、宋代に於ては如何でありませう。唐代の末期から、五代を經、宋代に入ると唐代の支那の性格は著しく褪色して、頗る近代的の性格を帯びることになりました。唐代、涇陽など主要の都市に、市が設けられたこと、並に市は場所的、時間的營業的に制限され、取締を受けたことは唐都と同様であつたのでありますが、かゝる原則は初めから、多少の例外は認められたことせうが、その後商業の發達するにつれて、その規則は次第に弛緩致しました。

首都長安に於ても、玄宗時代、東西市の近坊の地に商店が設けられ、唐末には、兩市に隣接する諸坊に少なからぬ商店の開設を見ることがなつて、市の制度は稍々弛緩したと云ふことが出来ます。只、桑原博士が王建の詩を引用して指摘される如く、徳宗の末年から憲宗の初世にかけて、揚州に於ては「夜市千燈、照碧雲、高樓紅袖紛紛々。如今不似、時平日、猶自笙歌徹曉開」に見ゆる如く不夜城の觀を呈し、京夜市の禁斷と著しい對照をなしてゐるのであります。

市の制度は、唐末を五代を經、宋に入つて益々弛緩し、坊制の崩壊と同時に瓦解し、從來市以外とは云へ猶坊牆の内部に引籠つてゐた商店は、進み出でて大街に面し、夜市の禁は破れて、夜更まで營業し、場所的

時間的の制限を憚らなくなりました。那波博士の宗敏求の「春明退朝録」巻上により引用され説明されます。如く、二紀以來街鼓の聲も聞かず、金光の職廢れたとあれば、北宋も四代目の仁宗の慶曆頃、夜禁の古制弛廢したと考へられます。又北宋に於ける宋都開封府の實況を記載した「東京夢華錄」によつて知り得る如く東京開封府の内城東南部、外城西南部、同東南部及び東部一帯は、酒樓藥店、妓館、茶坊、商店、瓦子の繁昌區域で、晝間より夜間の客を目的とし、燈火燦々として顧客を呼び、股賑を極めてゐたものであります。従つて、唐代に於ては、商店が場所的には、東西市に限定され、時間的には午時より日没までの制限をうけ物を賣質する記録が多く、唐都の東西市に關係してゐたことを想起し、隔世の感が致します。

唐代、兩京を始め、涇陽の如き主要な都市に市が設けられ、原則として商店は此處に設けられました。それが以下に於ては、民の自由に任せられ、そこには草市の如き地方市場があつて、地方住民の需要を充たしてゐました。草市は、又涇陽の城垣の近くにも存し、都城内市の機能を補ふたものであります。宋代に至つては、一方に於ては、地方草市の所在が發展して小都市を形成し、縣治と同列な地位に立つ鎮市として發展せるものを生じ、他方に於ては、都城内の「市」の制度が崩壊して城市に至る所に繁昌地區を出現すると同時に従來城外にあつた草市が、新たに外城の中に抱擁され新繁昌區域として擡頭して參りました。宋代に於ける、かくの如き、地方工商都市の發生、首都並に大都市の内部に於ける商工業の質的發展は唐代に於ける市制度の崩壊と相俟つて、この時代の著しい特色をなすもので、唐代のそれと比較し一大飛躍と云はなければならぬのであります。この故に、學者或は宋代をもつて都市經濟の階段に入つたものとし、唐代のそれを以て、ガラスの如く村落的都市と見誤ること理由なしとしないのであります。——第十二頁下段につづく——

舊第二十三小委員會は、小賣商問題を中心とした十餘の報告を夙に公表した。自作農制第二十一小委員會は「時局と農村」四巻を公表すると共に、爾後の報告の發表乃至整理に折角努力中である。中小工業第二十三小委員會は漸く報告發表の緒に就いた。「時局と中小工業」「本邦中小工業の研究」「海外中小工業研究」の三体系の下に、全報告が輯録される豫定である。このうち、「時局と中小工業」は主として關係者の共同執筆である。

「時局と中小工業」

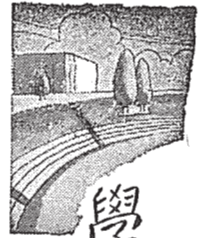
- 一、「轉失業問題」(山中東商大教授編、總頁六二七本年三月刊行)
- 二、「我國纖維工業の輸出伸張力」(瀧谷神商大教授編、總頁三五五、本年四月刊行)
- 三、「我國雜貨工業の輸出伸張力」(瀧谷神商大教授編)
- 四、「下請工業」(藤田大商大教授編、本年六月刊行豫定)
- 五、「統制組織」(磯部生編、本年七月刊行豫定)
- 六、「時局と中小工業の將來」(本年七月刊行豫定)

「本邦中小工業の研究」

- 一、「中小工業の地方分布」(山中東商大教授著)
- 二、「織物工業論」(同上)
- 三、「地方金物工業論」(豊崎大商大助教授著)
- 四、「漆器工業論」(磯部生著)
- 五、「陶磁器工業論」(赤松東商大教授著)
- 六、「中小工業の勞働力」(美濃口企畫院調査官著)
- 七、「中小工業經濟論」(山田前東帝大教授著)
- 八、「中小工業金融論」(小島京帝大教授著)
- 九、「問題」(荒木東帝大教授著)
- 一〇、「中小工業形態の發展」(赤松東商大教授著)
- 一一、「商業資本發展史」(藤田大商大教授著)
- 一二、「九州經濟と中小工業」(田中九帝大教授著)

「海外中小工業研究」

- 一、「獨逸職業競争」(海軍中將波多野工博譯編、總頁三九〇、本年三月刊行)
- 二、「獨逸家内工業」(山中東商大教授著)
- 三、「支那の中小工業」(藤田大商大教授編)



學内報

靖國神社遙拜式

靖國神社臨時大祭にあたり長くも御親
 拜の四月二十五日午前十時十五分を期し
 本學に於ても夫々千里山學舎、天六學舎
 の校庭に於て遙拜式を舉行、殉國の英靈
 に敬虔なる默禱を捧げ、千里山學舎では
 教職員學生一同式後忠靈塔に參拜本學出
 身の英靈に感謝の誠を披瀝した。

天長節拜賀式

四月二十九日天長の佳節に當り學部及
 豫科は午前八時三十分より豫科講堂に於
 て、専門部は同十一時天六學舎講堂に於
 て、拜賀式を舉行、謹んで聖壽の無窮と
 皇室の彌榮を祈念し奉つた。

報國團 結成

本學教育の補助機關として新に從來の

學友會に代るものとして組織された關西
 大學報國團の結成は所謂學團の新體制と
 して重大意義を持つこととなるがその各
 々の結成式は左の通り行はれた。

四月二十八日於天六學舎講堂専門部二
 部報國團結成式、同二十九日千里山學舎
 威徳館に於て... 學部報國團結成。
 同 豫科講堂に於て
 同 大學豫科報國團結成式
 同 天六學舎講堂に於て
 同 専門部第一部報國團結成式

常務理事更迭

本學常務理事玉木三郎氏は就任以來十
 年銳意本學の爲に盡瘁せられたが、今回
 辭任され、その後任として元東京控訴院
 判事矢口家治氏が選任された。

矢口理事は大正六年京大法科出身、文
 部省在外研究員として歐米に留學の後、

關西大學報國團綱領

本團ハ教育勸語並ニ青少年學徒ニ賜リタル勸語ノ聖旨ヲ奉體シ國
 體ヲ尊重シ國是ヲ認識シ學界一致戮力精進、文ヲ修メ武ヲ練リ剛
 健ノ氣風ヲ養ヒ報國ノ精神ニ徹シ、以テ負荷ノ大任ヲ全ウセンコ
 トヲ期ス

高岡高商教授、長野地方、東京民事地方
 裁判所判事、東京控訴院判事を歴任、本年
 五月退職の上本學理事に就任さる。

報國團役員

學部報國團

- 團長 神戶學長
- 副團長 類法文學部部長
- 事務部長 水谷經商學部部長
- 總務部長 水谷經商學部部長
- 訓練部長 安藤 教授
- 國防訓練部長 河村(宣)教授
- 體練部長 岩崎 教授
- 教養部長 木村 教授
- 厚生部長 木村 教授

大學豫科報國團

- 團長 神戶學長
- 副團長 村上豫科長
- 事務部長 八島學生主事
- 總務部長 河村(信)教授
- 訓練部長 橋口學生主事
- 國防訓練部長 飯田 教授
- 體練部長 三枝樹 教授
- 教養部長 大小島 教授
- 厚生部長 大小島 教授

専門部第一部報國團

- 團長 神戶學長
- 副團長 正井專門部長
- 事務部長 西本大 佐
- 總務部長 中村生徒主事
- 訓練部長 安川生徒主事
- 國防訓練部長 可野生徒主事
- 體練部長 桂會計主任
- 教養部長 松崎教務主任
- 厚生部長 矢口專門部主事
- 赤羽 教授
- 中村生徒主事

専門部第二部報國團

- 團長 神戶學長
- 副團長 正井專門部長
- 事務部長 西本大 佐
- 總務部長 中村生徒主事
- 訓練部長 安川生徒主事
- 國防訓練部長 可野生徒主事
- 體練部長 桂會計主任
- 教養部長 松崎教務主任
- 厚生部長 和村專門部主事
- 赤羽 教授
- 中川 教授

かくほう抄

▽城部喜一教授—今回大阪府職業指導委
 員に囑任せられた。
 ▽藤澤講師御息女—藤澤幸次郎講師御息
 女定子さんには五月一日逝去され、
 同五日生國魂寺町齡延寺に於て告別
 式が執行せられた。
 ▽三島律夫講師—長男忌明に當り、眞に
 尊父逝去の砌り創設せられた三島文
 庫の追加補充の資として金貳百圓天
 六圖書館に寄せられた。
 ▽南奨學資金—本學元協議員故南亮爾氏
 によつて設定せられた本學學生生徒
 の奨學の資に充てられた南奨學資
 金(參千圓—參百圓宛七ヶ年間拂込)
 は、同氏の逝去によつて中絶してあ
 り、生前同氏の恩顧を受けた、東
 京火災在勤の人々相集り、殘額三ヶ
 年分撥出を相謀り、このほど第一回
 分金參百圓也本學宛届けられた。

校 友

校友會支部結成

今回左記の支部が結成したことを御報告致します。

一、廣島支部 (昭和十六年四月二十一日)

支部役員 支部長 野田 保規

副支部長 今西 貞夫 加藤 亂

支部事務所 廣島市寶町中央通、野田保規方

一、香川支部 (昭和十六年四月二十七日)

支部役員 支部長 白川千代治

顧問 大柏清三郎 間島徳次郎

尙四月發行校友會誌第二號掲載の如く左記二支部はそれ／＼結成發會式を舉行した。

一、芦屋支部 (昭和十六年二月十一日)

支部役員 支部長 武田貞之助

副支部長 竹井小野右衛門 森塚圭城

支部事務所 芦屋市津知字保部一〇四、塚本論治 郎方

一、堺支部 (昭和十六年二月二十二日)

支部役員 支部長 楠野 泰夫

副支部長 井上專一郎 中村源治郎

支部事務所 堺市役所學事課、淺香新太郎氣付 堀畑 軒一 泉谷 興一

校友會備後支部

非常時局大講演會

尾道で開催さる

校友會備後支部が支部長中場彌太郎辯護士を會長と

する尾道時局研究会と共同主催で四月二十日午後七時から尾道市久保町廣島縣立尾道高女講堂で開いた非常時局大講演會は聴衆千餘、會場は全く立錐の餘地なきまでに超満員であつた。それは講師がいまだかつて學外に出て講演されたことのないといはれるわが經濟學界の泰斗關西大學々長法學博士神戸正雄氏をはじめ同教授岩崎卯一氏、同森川大郎氏らの堂々たる野界の權威者揃ひであつたからである。

定刻一同東方遙拜、默禱を捧げたのち中場備後支部長開會の挨拶に兼ねて神戸學長、岩崎森川兩教授を紹介、かくて先陣を承けて起つた森川教授は「戦時經濟と經濟戦争」と題して一時間餘、熱辯を揮ひ、續いて「日本政治の新展開」と題して岩崎教授得意のユーモア混りの雄辯で聴衆を酔はせ、最後に神戸學長は「日本經濟の發展の方向」と題して戦時下わが國經濟は如何なる方向に發展すべきかについて平易懇切に醇々と説き多大の感銘を與へ講演を終つて聖幕の萬歳を奉唱盛況裡に十時半閉會したが十時過ぎまで殆んど退場するものなかつたことは尾道としては近來の講演會にない珍らしいことであつた。

尾道經濟座談會

わが國經濟學界の權威を網羅する本學教授團の大舉來尾を傳へ聞いた尾道商工會議所では、またとない絶好の機會だと座談會に出席斡旋方を中場支部長に折衝あり、中場支部長は早速本學當局に交渉の結果學長以下同座談會に出席するとの快諾を得たので同會議所では二十一日午前十時から尾道市内商工業その他各方面の精選りの代表者數十名の出席を求め、前夜の講演會の疲れを休める暇もなく神戸學長以下岩崎、森川兩教授を圍んで「經濟座談會」を催した。



寫眞は「上」廣上の神戸正雄學長と

「下」會場を埋めた千餘の聴衆

かつて藩政華やかであつたころ、廣島藩の弗箱として同藩のお台所一切を賄つてゐたといはれるほどあつてその當時から股賑を極めた南港都尾道も自由經濟の途を斷られた今日では日一日と統制經濟の風波にさらされる度を深めつゝあり、如何にして時局に順應し、國策に副ふべきかについて焦慮してゐた矢先としての經濟座談會參會者はいづれも熱心に、時局下經濟問題を祖上にあらゆる角度から質問、これに對して神戸學長、岩崎、森川兩教授からそれぞれ懇切丁寧な明答を與へて指導したが、今後商人の進むべき途をハツキリと明示し得るまでの示唆に富んだ意見にいづれも得難い收穫を擧げたと満足して十一時半過ぎ盛況裡に散會した。

(御堂河内記)

學長初め四氏を迎へて

備後支部總會開く

本學校友會備後支部では尾道時局研究会と共同主催で開く講演會に講師として來尾の神戸正雄學長、岩崎、森川兩教授および神屋敷學報局主任を迎へて二十日午後三時から尾道市十四日町尾道最大の西山旅館二階で臨時總會を開いた。相會するもの中場支部長以下地元尾道在任者のほか、福山市長小林壽夫、同市助役小林和一兩氏および呉に居住の若本英修氏など八名、數は極めて少かつたが、いづれも母校を愛する念、人一倍強い方たちばかりで、型の如く遙拜、黙禱ののち中場支部長の挨拶について神戸學長から本學内の近況と校友會の活動狀況など詳細な報告をかねての挨拶があり會務報告ののち議事に入り

今後支部の會合のあつた場合は校友相互が連絡をとつて出席するやう計ふこと、支部總會には必ず本學からも講師を派遣するやう要望すること、支部の活動をを通じて一層本學の向上發展につくすことなどを

申合せ

引續き懇談に移り、晚餐をとにし、副支部長小林福山市長の閉會の言葉で和やかなうちに同六時總會の幕を閉ぢ一同打揃つて自動車で講演會場に向いた。

なほ當日の出席者氏名は左の通り

(本部)

會長神戸正雄博士、常任幹事岩崎卯一教授、同森川太郎教授、神屋敷學報主任

(支部側)

支部長中場彌太郎、副支部長小林壽夫、幹事小林和一、御堂河内四市、若本英修、松本政夫、金田幸彦、吉本房造

廣島支部發會式

豫て廣島市在住校友有志相集りて二、三回會合を持つてゐたが、正式に支部結成とまで至つてゐなかつた然しその間三宅萬吉、加藤亂、木村鹿男、熊野猛、それに大朝米千支局に轉任の畦地哲郎其の他の諸氏相謀り、支部發會式舉行の議をすゝめてゐたが、たゞ母校學長神戸博士並に岩崎、森川兩教授が、尾道市に於ける校友會備後支部主催、時局大講演に出席される機會に一行の出席を得て四月二十一日午後六時より廣島市新川場町「壽司徳」に於て盛大に發會式を舉行した。

定刻、三宅萬吉君より挨拶を兼ねて支部設立に至る經過の報告あり、會則を審議して可決、支部長に母校の先輩野田保規氏を満場一致推薦し、野田氏は快諾の上會員一致協力母校の爲盡力を誓ふ旨の挨拶あり、副支部長に今西貞夫、加藤亂の兩氏を、幹事に熊野猛、藤井正信、木村鹿男、三宅萬吉、鍵尾豪雄、橋保次の諸氏を支部長より依頼し、ついで神戸學長立ちて支部結成の祝辭を呈し、ます／＼發展の途をたどりつゝあ

る校友會の近狀を報告し、兼ねて母校關西大學の現況に及び御挨拶中の先月末より本月初にかけて行はれた入學試験志願者の激増振りに吾々を學當時の事も思ひ合せ、母校聲價の高まりつゝある事實を今更の如く感じ、又思ひ出多き學友會は本年三月末限り解消し、四月より報國團を結成し報國精神による新練成團體として、新しく發足する大學の堅き決意と熱意を伺ひ會員一同母校當局に絶大の聲援を送り協力を誓つた。それより宴に移り、愉快に時を過し、午後八時半木村鹿男君閉會の挨拶をのべ、神戸學長聖壽の萬歳、野田支部長母校關西大學の萬歳を三唱して閉會した。

出席者

來賓 神戸學長、岩崎卯一、森川太郎、神屋敷學報

東正實、今西貞夫、大西政吉、沖公夫、加藤亂、鍵尾

豪雄、神田清、木村鹿男、橋高勇夫、熊野猛、田窪重

夫、野田保規、三宅萬吉、吉本延行、若林正、岩武俊

三、山本 善一、神戸鶴三、井上日九

香川支部發會

春朝の四月二十七日午後三時より校友會の一威力として高松市栗林公園翔月亭に香川支部の發會を見た。

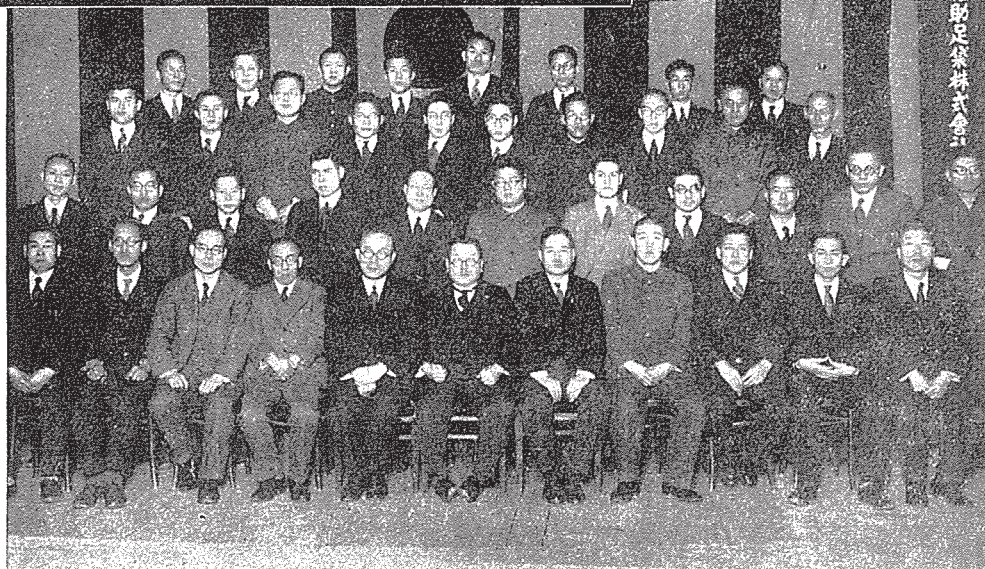
在住校友五十數名の多きに上る香川縣では從來からこれら校友間の聯絡機關のない事を遺憾とせられておたが、この程近縣支部の活躍に刺戟されて大柏清三郎大西敬弘、間島徳次郎、白川千代治の諸氏發起人となり新に香川支部結成を議し來つたが、最近に至りその結實を見たものである。

天下の名園しかも畏くも 明治天皇に御縁ふかき翔月亭に於てその景觀を賞でつゝ同日午後三時白川千代治氏の閉會挨拶、經過報告に初まりその間の發起人各位の勞苦をしのび次で會則審議、役員選舉を行ひ満場一致で可決、新役員として左の諸氏その任に當る事となつた。

支部の發會式
と支部總會



部支屋芦(上)
會總部支後備(中)
部支堺(下)



支部長 白川千代治 (辯護士)
顧問 大村清三郎 (丸菱市長)
同 關島徳次郎
尙書等は郡部在任者の便を考慮して後日指名の方法により決定の筈

次で校友会常任幹事若崎卯一教授の校友会並に學校の近況、特に校友会の強化と最近の學校の質的向上とを力説、多大の感銘を與へ吾々一段の奮起を決心した宴に移るや名園の暮景また忘れ難き風情に興一入すぐれて今日の會合を一層有意義にし、名残をおしみつゝ午後八時半閉會した。

尙支部事務所は高松市内町三八、支部長白川千代治氏方に置く。

一つの幸福を持つて

秀麗會 關東州支部例會

三月十八日關東州支部第五十九回例會を寺内通りの海務協會で開催、會するもの十一名で今月は旅行其他で缺席の二、三名を除いていつもの顔振れが見られるKさんいつものニコニコ顔でしきりに何かを見てござる。十數枚の初孫さんの寫眞である、それを吾々に示して名實ともに光頭燦然たるおちい様振りである。これに負けずとY君二世の百態を示す。若くとも立派な父ちゃん振りである。

兎に角こんな調子で此處に集る校友は一つの幸福と云つた様なものを持つてゐる。利害關係で集つてゐるのではないからどうしてもそんなのであらう、頗る朗らかなものである。吾々は人世に心から朗らかな集りの一つ位持つ事は必要だこれにこの秀麗會をあてはめて欲しいのだ。又概して校友会の集りといふものはその適格性を持つてゐるものだが……。「一ヶ月に一回だ、つとめて出席してくれどもいゝ」とはある幹事の言「僕もこれからは返事だけでも出すよ」とは某君

の恐縮の辯、皆夫々責任を感じてゐる。それでいゝのだ、來月の例會は十六日以降差し支へる方が多いと云ふので十五日に繰上げて開く事に決定、いつもの様に學歌齊唱會したのが九時過ぎだった。

出席者、木村儀八、秀島全治、山上三郎、萩原博池内輝一、早川源四郎、北條茂義、寺田英治郎、吉村立朝、平井三朗、竹若隆三

竹林直信君慰勞會

清和會(大十四)の集ひ

大正十四年度専門部法科出身の者が集つて清和會を組織してゐるが、今回同會員の信貴山病院事務長竹林直信君が歸還したのでその慰勞會を去る二月十八日、梅田新道の共同ビル地階食堂に開催、同君を慰はるやら目新しいニュースを聞くやらの有意義な會合であつた。

同夜は幹事安田清治郎君の挨拶に次で竹本君の言葉少くも眞摯な態度で慰勞會への感謝の辭があつた。次で座談に移り、同氏の約二年間の大陸に於ける騎



書せ寄の部支川石

出席者名
加藤金次郎、多久和長三郎、須佐美八郎、森川太郎、吉田敬治、西川吉雄、深川重義、飯田幸一、林崎富二、松尾高一、長谷正事、西村治三郎、山下文次郎、天野平一、吉田平三郎、内田政一、本宗喜一、脇野徳三郎、天崎孝嗣、中谷政男、多田時造、前田豊吉、竹信守、中西順吉、堀四郎

尼崎支部第二回總會

第三回總會は昭和十六年四月十二日午後五時より尼崎市内の割烹「朝日」に於て開催した、出席會員二十二名、來賓に母校の加藤、森川兩教授及川邊支部深川重義氏等の來席あり、先づ天野平一氏開會の辭を述べ次に松尾支部長の挨拶の後を受けて川邊支部深川重義氏より一場の懷舊並に時局談あり聴者に強き感銘を與へ終つて聖壽の萬歳、當尼崎支部の萬歳を三唱した、次に議事に入り役員改選を行ひ満場一致拍手裡に決定し引續き松尾支部長の重任挨拶及山下副支部長の新任挨拶あり、夫れより會員相互の歡談に移り晚餐を共にして午後九時盛會裡に閉會した。

兵隊長としての活躍、幾たびか最前戦に生死の巻に立ち殊勲を現はして司令官より感状を授與せられるなど戰陣訓を地で行く勇壯談や大陸實地見學談を初め、學生時代運動部長だつた富田英雄君の急速な成功の消息談、彼地に於ける校友の活躍振りなど話題盡きぬまゝに九時解散した。因に當日の出席者次の如くである。

竹林直信、井上賢一、濱崎保太郎、小川英三、梶榮鷹見文博、巽千代造、裏野三治、安田清治郎、佐伯三郎、北田康民、茂野富士憲、岸田駒太郎

◇會員消息◇

青木 太郎(昭四 專法) 滿洲電信電話會社より海拉爾
放送局に轉職、同局長に就任

坪 登巳雄(昭一四專一法) 西宮市今津浦風町一ノ一、
鶴之莊に轉居

麻中 信好(昭一三專一商) 住吉區濱日町東二ノ二六、
菊川博方に轉居

綾木 昇(昭一三專一商) 召集解除、勤務先は以前の
日本生命保險會社

綾野進一郎(昭一二專一法) 本學庶務課を辭し、蒙彊張
家口蒙彊銀行に奉職

荒井 精一(昭一四專一商) 神戸市林田區長田口一里山に
轉居

井上 政二(昭一〇專一商) 松下と改姓、吹田市千里山
三四七に轉居

井並 則之(昭一三大法) 警部補に任じ、鳳署より今福署
へ

揖斐 末人(昭一六大專) 日立製作所山手工場に勤務、
住所は茨城縣日立市宮田一九一八、濱ノ宮寮

池田 信一(昭一六專一商) 中支上海閔行路二五七、二
五九號に轉居

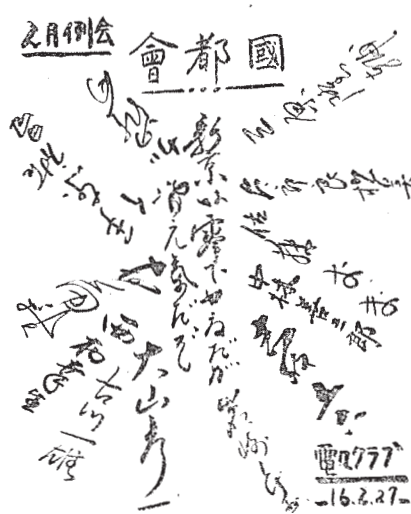
石村 巖(昭一六專一經) 日本發勸機會社に入社

石津 勉治(昭一六大法) 東京市芝罘上寺前協調會館、
荒木能率研究所に勤務

市川 勝(昭一五大專) 山形縣酒田市傳馬町五三に轉
居

宇田 良治(昭一六專一法) 京都市上京區猪熊通下立賣
下ル、田中榮一方に轉居

上羽 正七(昭一六大法) 東部第二部隊に入營
内山 勇(昭一二大法) 佐賀市立實業青年學校教諭よ
り神戸市北野青年學校に轉勤、住所は同市灘區福住



浦崎 浩政(昭七 專商) 新京特別市水仙町二ノ一に轉
居

浦谷 武男(昭一六大專) 奉天市鐵西通喜工街、日滿鋼
材工業會社材料課倉庫掛に勤務、住所は同區興亞街
二段十九號、滿蒙毛織會社々宅第一號浦谷勇吉方

小山田則孝(昭五 大法) 福岡市地行東町四ノ一二九に
轉居

尾崎 林藏(昭一六大專) 日立製作所電線工場に勤務、
住所は茨城縣日立市宮田一九一八、濱ノ宮寮

尾崎 貞雄(昭一五專一商) 大分縣佐伯海軍航空隊第一
士官室に入隊

織田 正一(昭四 大專) 堺署より府經濟保安課へ轉勤

大浦 泰輔(昭一二專一法) 朝鮮總督府企畫部より黃海
道地方課長兼國民總力課長に就任、住所は黃海道海
州府中町一〇〇官舎

大橋 正信(昭一六大法) 大正區船町中山製鋼所に入社

大田又兵衛(昭二 專商) 日本合成染料販賣會社大阪支
店に勤務

押谷 正男(昭一一大法) 召集解除、齋藤塗料製造所に
勤務、住所は豐中市北刀根山七四

奧村 寬(昭一六專一商) 東京電氣會社に入社、住所
は川崎市渡田山王町一四小塚方

角谷 榮(昭一五專一法) 大阪東亞必需品輸出組合よ
り日本絹人絹糸有輸出組合聯合會に轉職

勝田 章(昭一五專一商) 東成區猪飼野大通二ノ二四
に轉居

勝間田正泰(昭一四專一商) 吹田市北泉町三一九三に轉
居

金 咲 實(昭一五專一商) 滿洲第六四二部隊に入隊

金丸 毅(昭一六大法) 東京市日本橋區吳服橋三ノ七
東京建物會社に勤務、住所は中野區野方町一ノ六七
三、田窪方

唐金 利平(昭九專一法) 召集解除

川越 茂樹(昭一四大專) 北支大同縣平旺村大同炭礦よ
り濟南市四大馬路緯二路、同炭礦濟南出張所に轉勤

木田 篤孝(昭一一大專) 東洋火災保險會社を辭し、秋
田木材會社に入社、大阪支店に勤務

菊川 博(昭二 大法) 博文と改名、酒井包義商店よ
り東區北太郎町四ノ五九、三昌商會に轉職

栗山 基一(大三 專法) 富山縣出町區裁判所より同縣
魚津區裁判所に轉勤、住所は同縣下新川郡魚津町白
屋小路二七ノ一三

吳 健一(昭一六大法) 朝鮮總督府司法官試補として
京城地方法院及檢事局に事務修習、住所は太平通一
ノ六六

小坂 克巳(昭一〇大法) 東京火災保險を辭し、奉天市
大和通加茂町、日滿商會社に轉職

五島 守(昭一六大法) 奉天省官房總務科企劃股に勤
務、住所は奉天市富士町一、武久興三吉方

佐澤 寬(昭一三專一商) 九州帝大法科卒業後日本電
力會社に入社、總務部文書課に勤務

佐藤 貞行(昭一五專一法) 豐能郡箕面村牧落六五ノ一
に轉居



佐藤虎太郎(昭九專一商) 昭和十五年八月召集解除、帶
廣市東一條南三ノ一一に轉居
齋藤 新八(昭三三天商) 召集解除、東京市麹町區丸之
内二ノ一八岸本ビル、日産自動車販賣會社軍納部軍
納第二課に勤務、住所は同市世田ヶ谷區玉川貞澤町
一ノ一〇六
阪原淳太郎(昭二大法) 大阪通信局海軍部に勤務
坂根 寅夫(昭二專二商) 勤務先日本スビンドル製作
所が日本内燃機會社と社名變更
笹岡藤四郎(昭一五專二商) 吹田市千里山二二七に轉居
清水 正春(昭一專二法) 上海日本總領事館警察署に
勤務
芝崎 進(昭八 大法) 四月十日召集解除
首藤 義教(昭一四專三法) 東京市中野區大和田町六三、
黑崎源吉方に轉居
白川 昇(昭一專二商) 滿洲國吉林省雙陽縣雙陽金
融合作社より懷德縣范家屯街興農合作社に轉職
鈴木千代松(昭九專二法) 任警部補、中津署より九條署へ
砂堀 正(昭一六專一商) 朝鮮運送會社群山支店に勤
務、住所は群山府千代田町一丁目錦屋寮
田中 茂(昭二專二商) 野村銀行大宮支店より東京大
森支店へ
田中 健夫(昭九專一法) 金澤市下欠原町七に轉居
高野 長夫(昭五 專二商) 泉澤郡貝塚町堤五〇に轉居
高部 和男(昭三 專商) 東北振興アルミニウム會社
より滿洲工廠、滿洲鑛物會社東京支店長に轉職
高村 義光(昭九專二法) 東部第三部隊に入隊
瀧口 武雄(昭九專二法) 滿洲生活必需品會社に勤務、
住所は新京特別市安達街六二五
石川支部の寄せ書

竹谷 讀貨(昭六專法) 築港署より府經濟保安課へ轉勤
千葉 計次(昭一〇大法) 召集解除
地村 勝(昭一專二法) 松下無線會社を退社
趙 鐘(昭一三專一商) 安田吉毅と改姓名、慶尚南
道產業部商工第二課に勤務、住所は釜山府草梁町九六
東條 秀美(昭三專二商) 住吉區昭和町東二ノ一に轉
居
東條 健二(昭一五專二法) 居
外村 治義(昭九 大法) 京城府新堂町三ノ六に轉居
富永 一郎(昭一六大法) 日立製作所海岸工場に勤務、
住所は日立市宮田一九一八濱ノ宮寮
虎尾 謹一(昭三大法) 勤務先合併により三和信託と
改名、今橋三、同本社に勤務、住所は西宮市神隈東
河原九
名越 日月(昭四專法) 任警部、經濟保安課より大和田
署へ轉勤
中川 政人(昭八專一法) 東區安土町四ノ五五、田村合
名會社に入社
中野 繁男(昭一三專二商) 住吉區中野町八五八に轉居
中野 博(昭一六專一商) 靜岡縣原郡蒲原町、日本
輕金屬會社へ入社、蒲原工場試験課に勤務
中村 忠夫(昭九專一商) 四月十日中部廿四部隊に入隊
中村 作郎(昭一〇大經) 兵庫縣豐岡商業學校より姫路
商業學校へ轉勤、住所は姫路市北條口二七
中原 健造(昭四專法) 芦屋市芦屋伊勢講田八三八に
轉居
長井 辰二(昭一六專一商) 朝鮮咸興府知樂町九〇、北
鮮合同電氣會社に入社監理課に勤務
西山 友市(昭一五專二法) 土岐と改姓、神戸市須磨區
板宿町三ノ五七に轉居
野田 平三(昭四 專一商) 港水上署より府特高課へ轉勤
狹間 宏昭(昭一六專一法) 咸鏡南道高原郡水洞面仁興
里住友高原鑛山に勤務
橋本 好三(昭九專一商) 關西信託より三和信託會社に
轉勤、大阪支店に勤務
長谷川義男(昭二專二法) 兵庫縣明石郡垂水町東垂水
四七ノ一〇に轉居
畑 義博(昭二專法) 大日本機械工業會社本所工場
より青戸工場に轉勤、總務課長に就任
林 徹夫(昭一五大法) 神戸市灘區天城通八ノ六ノ七
八に轉居
原田 常義(昭三 專法) 大分縣四日市署より長洲署へ
轉任
平賀 松男(大三 專法) 和歌山市宇治家裏鐵道官舎一
に轉居

第五頁中段よりつづく
七

以上を總觀致しますに、グラスの見解とは異なり、
支那に於ては、道德的、藝術的に高いと同時に、物質
的、經濟的にも低しとせざる商業都市が、——たとひ
それは市制度に見ゆる如く場所的、時間的、その他の
諸制限を受けたものとは云へ——唐代、唐都を中心と
して出現し、唐末五代を経て宋代には、内包的にも外
延的にも著しく擴大して、商工階級が支那の傳統的な
諸制限を一掃するに至つたこと、並に、支那に於ては
唐代已に商工業者が共に一階級として商工社會を形成
し、商工業者の團體である商工ギルドを組織して、商
業都市より商工都市と云ふ、グラスの階段を経つて
同時的存在として出現したこと、更に、グラスの云ふ
如き、商工業者が一階級となり、團體を組織するに至
つても、都市政治を支配するに至らなかつたこと等、
支那の唐宋代都市の一般的性格と特殊の性格との一端
に觸れましたことと存じます。

終りに當りまして、拙連の草稿にて、貴重な紙面を
汚しましたことを編輯者並に諸賢に御詫びすると同時
に、昨夏御示唆と材料を提供して下さいました前康徳
學院屋井學監、御垂教を辱ふしました那波利貞博士、
同博士に御紹介を賜つた四宮大阪商大教授、及びこゝ
に引用させて頂きましたグラス教授(前掲書) 那波利
貞博士(支那都市計畫史上より考察したる唐の長安城、藤原博士遺稿
史大系)、加藤繁博士(唐宋時代の市、福田博士遺稿論文集、唐宋時
代史)、宋元時代の草市及びその發達、市村博士(支那の市、東洋文化
論文集)、東洋史叢書、支那經濟史、改進黨雜誌、根岸信博博士(支
那の市)、桑原博士(支那の市)、白鳥博士(支那の市)、白鳥博士(支
那の市)、東洋史叢書、支那經濟史、改進黨雜誌、根岸信博博士(支
那の市)、桑原博士(支那の市)、白鳥博士(支那の市)、白鳥博士(支
那の市) 東洋史學者の諸著作について教へを受けたことを深謝
すると同時に、支那經濟史について不熟のため或は誤
解をなし御勞作を傷けなかつたかを顧み御叱正を賜ら
んことを御願ひする次第であります。

平野 石雄(昭一四專英) 青屋市三條小里九八に轉居
 廣田 弘應(昭八 大法) ワタナベ商店を退社、工具市
 場に轉職、住所は布施市菱屋西二九九
 深尾 弘(昭一六六政) 内務省警保局外事課に勤務、
 住所は鎌倉市材木座上河原町一三九、高橋等方
 福井 秀夫(昭二二大法) 召集解除
 藤井 忠夫(昭二二大法) 西宮市今津浦風町一七に轉居
 藤井 三男(昭二二大法) 新京特別市大同大街、滿洲電
 信電話會社に入社總務部人事課に勤務
 藤田 隆(昭二二專法) 任警部、天満署より堺署へ
 冬木 伊作(昭九專一法) 兵庫縣明石郡垂水町西垂水三
 二一九ノ一に轉居
 本郷謙一郎(昭八專二法) 奈良縣高市郡高取町觀覺寺に
 轉居

前川 正行(昭一六六商) 石原産業海運會社に就職、大
 阪本社調度部機材課に勤務
 前田庸三郎(昭二二大法) 太平洋海上火災保險會社を辭
 し大阪海上火災保險會社に轉職
 三本 茂(昭一專三法) セドラバースレット會社よ
 り姫路市高尾町六一四山陽製糖會社に轉職
 水間 通夫(昭一六六法) 東京市麴町區有樂町一、第一
 生命保險相互會社東京本社に入社、住所は同市大森
 區山王二ノ一八五〇山王莊
 宮田 芳穂(昭一六專二法) 立命館大學法文學部に入學
 毛利 義範(昭一專四) 會田實科中等學校より松本中
 學校に轉勤

望月 保彦(昭一六專一經) 新京滿洲重工業開發會社に
 勤務、住所は新京特別市東光區水吉街三〇二號東光
 寮一六一號室
 八木 正一(昭六 專法) 九條署より府警務課へ轉勤
 山川 正七(昭一四專一商) 京城府黃金町二ノ一九五、
 朝鮮畜産會社に勤務
 横井 信義(昭一二專法) 神奈川縣平塚市平塚第一青年
 學校教諭に就任、住所は同市本宿一一五五
 横山 孝美(昭一六專二法) 大阪市役所より厚生省保險
 院簡易保險局に轉職、住所は東京市荏原區豐町五ノ
 一一一、宇都宮方

吉住 章(昭一五專二商) 三月二十三日入營
 渡邊 博(昭八專一商) 大正區小林町一八一港電機工
 業所に入社、同青年學校主任指導員兼庶務部に勤務

改姓名

昭二 大法 菊川 博。新 文。

昭九 專國	梅田 貞次	櫻 義也	櫻 本
昭九 專二商	櫻 井 夫	義 也	也
昭十 專二商	井 上 政二	松 下	
昭十三 專國	星 川 治	岡 野	
昭十三 專一商	趙 鐘 丁	岡 野	
昭十五 大法	有木 勝之輔	安 田 毅	
同 專二法	李 範 鎬	鈴木 勳	
同	西山 友市	土 岐	

昭和十五年度決算報告(自昭和十五年一月至昭和十五年十二月)

關西大學千里山學友會

基本金之部

收 入	三、五八、〇〇
前年度繰越金	二、〇〇、〇〇
入 會 金	一、四六、五〇
信託預金利子	一四、五〇
當座預金利子	三、八七、〇〇
計	三、八七、〇〇
支 出	三、八七、〇〇
無 差 引 計 金	三、八七、〇〇

經常費之部

收 入	五、〇〇、〇〇
前年度繰越金	五、〇〇、〇〇
前年度大學祭費殘金	六、〇〇
昭和十四年度會費	三、七五、〇〇
第二學期分	六、〇〇
同 第三學期分	三、七五、〇〇
昭和十五年度會費	六、〇〇、〇〇
第一學期分	五、〇〇、〇〇
同 第二學期分	五、〇〇、〇〇

逝 去

石井健太郎(昭二三專二商) 三月三十日逝去、遺族は池
 田市石橋一〇(父) 格治氏
 高 道 翊(昭一專一法) 一月十六日逝去
 酒井 勝彦(昭一六專一經) 四月十八日逝去、遺族は兵
 庫縣川邊郡立花村七松稻荷二(父) 勝得氏
 細谷 國雄(昭九專一商) 逝去
 山口 正芳(昭七 大法) 三月二十八日戰死、遺族は兵
 庫縣三原郡阿那賀村に住居
 吉岡 啓三(昭二二大法) 四月二十五日死去

當座預金利子

支 出	五九、〇一
野 球 部	一、〇〇、五〇
庭 球 部	八〇、五〇
ラグビー部	六五
柔 道 部	一、八八
水上競技部	五五
相 撲 部	七〇
陸上競技部	一、〇五
ホッケー部	二七五
佛敎青年會	一〇
卓 球 部	一七五
弓 道 部	一四一
音 樂 部	一〇五
山 岳 部	六五
フエニシジ部	一五
射 擊 部	五九〇
新 聞 部	八五
籠 球 部	三五
英 語 會	三〇
拳 法 部	五五〇
スキー部	一〇
計	一六〇、七五
收支差引金	三、五八、〇〇

(次年度繰越)

關西大學天六學友會(專門部第一部)

基本金之部

收入

前年度繰越金 三、六〇〇.九五

入會金 八、九一〇.〇〇

銀行預金利息 六、九七

計 四、八七二.七三

支出

經常部豫算外支出 三、〇〇〇.〇〇

次年度繰越金 四、四七二.七三

計 四、八七二.七三

經常費之部

收入

前年度繰越金 七〇〇.八六

第一期費 八、二〇〇.〇〇

第二期費 二、一〇五.〇〇

第三期費 三、一〇五.〇〇

銀行預金利息 二、九三三.〇〇

計 八、二〇六.八六

支出

經常費豫算支出 八、四五〇.〇〇

一、文藝部費 一、八九五.〇〇

文藝部長費 一、一〇〇.〇〇

辯論部費 四〇〇.〇〇

雜誌部費 三〇〇.〇〇

新聞部費 四七〇.〇〇

映譜研究部費 三三〇.〇〇

音樂部費 一、〇五〇.〇〇

二、運動部費 五、三〇〇.〇〇

劍道部費 六〇〇.〇〇

柔道部費 六〇〇.〇〇

庭球部費 三〇〇.〇〇

卓球部費 一七五.〇〇

相撲部費

米式蹴球部費 二五五

馬術部費 一四〇

山岳部費 二七〇

拳法部費 五二〇

陸上部費 五七〇

水泳部費 二二〇

野球部費 五〇

三、委員會費 一、三〇〇.〇〇

次年度繰越金 八、二〇六.八六

計 八、二〇六.八六

關西大學々友會(專門部第二部)

基本金之部

收入

前年度繰越金 二、六三三.一

入會金 三、四六〇.〇〇

信託預金利息 七、六一四.六

銀行預金利息 一〇七.三三

計 二、四、四七〇.〇九

支出

秋季體育大會費用 三、〇〇〇.〇〇

卒業生記念品代 七、四四〇.〇〇

次年度繰越金 二、三、五五三.〇九

計 二、四、六四七.〇九

經常費之部

收入

第一期費 一、三、五三三.三

第二期費 三、一〇三.三

第三期費 五、二九、五〇

銀行預金利息 四、九三三.〇〇

計 一、三、二七、六

支出

經常費豫算支出 一、三、五五三.九八

一、幹事會費 六、九〇〇

二、共濟部費 九、〇〇〇

三、文藝部費 一、〇五〇.〇〇

四、運動部費 五、七六五.〇〇

運動部長費 四、五〇〇.〇〇

劍道部費 一、〇〇〇.〇〇

柔道部費 一、二〇〇.〇〇

陸上部費 三、五〇〇.〇〇

水泳部費 一、〇〇〇.〇〇

相撲部費 一、〇〇〇.〇〇

豫備費 六〇

五、辯論部費 九、〇〇〇

六、新聞部費 一、五〇〇.〇〇

七、特別豫算支出 一、五三三.九八

春秋學生大會費 五〇〇

商業專門研究會 二、三〇〇

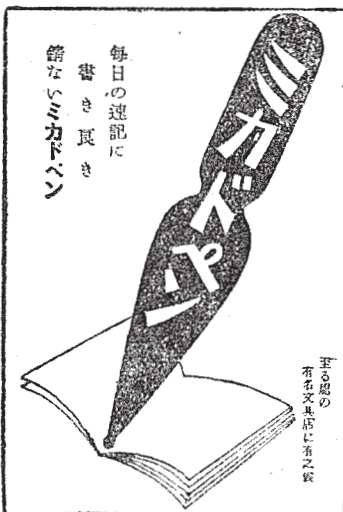
法理研究會 三、七七九

經友會 三、九

八、豫備費 一〇〇.〇〇

學友會館積立金 七、三二九

計 一、三、二七、六



毎日の速記に
書き良き
筆なミミカドペン

筆の速記の
有名文具店に有之

本學年度學科目擔任表

法文學部

法律學科

社會學、社會政策	岩崎 卯一
經濟政策概論	磯部 喜一
信託學	石田文次郎
東洋倫理學	石濱純太郎
英法、信託法	本莊鐵次郎
支那語	與平定世
英法、物權法、法律學演習	和田豐二
佛語	加藤金次郎
法律學演習	吉田一枝
哲學、西洋倫理學	武內省三
保險法	武田藏之助
會社法、手形法、小切手法	竹田省
獨語	谷友幸
東亞問題	谷口吉彦
英法	谷口知平
國際公法(戰時)	恒藤 恭
行政法總論、行政法各論、法理學、法律學演習	中谷敬壽
債權總論	中島玉吉
日本文化史	魚澄惣五郎
獨法、商法總則、商行為、法律學演習	野村次夫
佛法、國際私法	柳瀨兼助
民事訴訟法、法律學演習	山田正三
支那文化史	矢野仁一

獨法	山本戶克巳
日本法制史	牧 健二
經濟原論	正井敬次
獨法	福島四郎
英法、海商法、法律學演習	安藤 光
民事訴訟法、破産法	齋藤常三郎
憲法、自治行政	佐々木惣一
刑事訴訟法、法律學演習	佐伯千仞
佛法、親族法、相続法、法律學演習	木村健助
財政學	三谷道麿
刑法總論、刑法各論	宮本英脩
國際公法(平時)	末廣重雄
民法總則	末川 博

政治學科

社會學、社會政策、政治學、政治學演習、政治學特殊問題	岩崎 卯一
工業政策、經濟政策概論	磯部 喜一
政治史	池田 榮
東洋倫理學	石濱純太郎
外國經濟事情	岩井良太郎
統計學	滝川 虎三
信託法	本莊鐵次郎
支那語	與平定世
政治書讀	川上敬逸
獨語、佛語	加藤金次郎
財政學	神戶正雄
政治學史	吉田一枝

文學科哲學專攻科

哲學、西洋倫理學	武內省三
簿記、商業政策	瀧澤喜千雄
會社法、手形法、小切手法	竹田 省
獨語	谷友幸
東亞問題	谷口吉彦
國際公法(戰時)政治學特殊問題	恒藤 恭
行政法總論、行政法各論、法理學	中谷敬壽
國民政策	中村良之助
親族法、相続法	中島玉吉
日本文化史	魚澄惣五郎
商行為、商法總則	野村次夫
政治學	黑田 覺
國際私法	柳瀨兼助
支那文化史	矢野仁一
經濟原論	正井敬次
日本法制史	牧 健二
政治書讀	藤本進治
債權總論	福島四郎
日本經濟史	黑正 巖
海商法	安藤 光
農業政策	赤羽豐治郎
憲法、自治行政	佐々木惣一
債權各論、物權法	齋藤常三郎
民法總則	木村健助
刑法總論、刑法各論	宮本英脩
國際公法(平時)、外交史	末廣重雄

文學科英文學專攻科

東洋倫理學、支那文學	石濱純太郎
美 學	井 島 勉
拉典語、倫理學	服部英次郎
東洋哲學特殊問題	木田茂之
文學概論	堀 正 人
認識論、哲學演習	大小島真二
心理學、特殊問題	岡 道 固
哲學史特殊問題	澤瀉久敬
宗教學	片山正直
財政學	神戶正雄
哲學、倫理學、西洋倫理學	武內省三
哲學演習、倫理學演習	高瀬武次郎
東洋倫理學、特殊講義	中谷敬壽
行政法總論	黑田 覺
政治學	矢口孝次郎
文 明 史	前田聽瑞
印度哲學、宗教學特殊問題	正井敬次
經濟原論	藤本進治
獨語、哲學演習	佐々木惣一
憲 法	三枝樹正道
教育學、教授法	宮崎 幸三
西洋哲學思想史	下程 勇吉
西洋哲學思想史	新町 德之
東洋哲學思想史	菅 守 常
哲學講義、西洋美術史	鈴木周作
論理學、論理特殊問題	鈴木周作
國文學	鈴木周作
獨語	磯部 喜一
支那文學	石濱純太郎
英 學	井 島 勉
言語學	今川太郎

經商學部

經濟學科

ラテン語	服部英次郎	支那語	與平定世
文學概論、英文學	堀正人	佛語	賀來俊一
英語學	細江逸記	會計學、簿記、佛語	加藤金次郎
心理學	大平頼母	國際公法	川上敬逸
佛學	岡道固	財政學	神戶正雄
宗教學	賀來俊一	英語經濟學研究、交通經濟學、經濟學演習	河村宜介
佛學	片山正直	憲法、行政法總論、行政法各論、政治學史	吉田一枝
哲學	加藤金次郎	簿記、商業政策	瀧澤喜子雄
獨語	武内省三	哲學、西洋倫理學	武内省三
英文學	谷友幸	經濟史、經濟演習	田邊信太郎
文明史	村上喜貞	海商法	武田藏之助
英文學	矢口孝次郎	會社法	竹田省
獨語	山田松太郎	獨語	谷友幸
教育學、教授法	赤羽豐治郎	國際經濟論、東亞問題	谷口吉彦
佛語	三枝樹正道	損害保險論	瀧谷善一
西洋美術史	三木	經濟地理、植民政策	中川庸太郎
國文學	菅守常	景氣變動論	中村夏之助
	鈴木周作	親族法、相続法	中島玉吉
		經營經濟論	村本福松
		日本文化史	魚澄惣五郎
		倉庫論	野村次夫
		政治學	黑田覺
		國際私法	柳瀬兼助
		支那文化史	矢野仁一
		經濟原論、經濟學演習	正井敬次
		貨幣論	松岡孝兒
		債權總論	福島四郎
		保險論	近藤文二
		日本經濟史	黑正巖
		商法總則、手形法、小切手法	安藤光
		獨語、農業政策	赤羽豐治郎
		取引所及市場論	佐伯三郎

商業學科

破産法、債權各論、物權法	齋藤常三郎	民法總論	木村健助
刑法總論、刑法各論	宮本英脩	外國為替、商業數學	三木純吉
銀行論、金融論、商業學演習、英語經濟學研究	森川太郎	簿記	末廣重雄
會計監査	須藤文吉	簿記	陶山誠太郎
社會學、社會政策	岩崎卯一	經濟政策概論、工業政策、經濟學演習、獨語	磯部喜一
經濟政策概論、工業政策、經濟學演習、獨語	石濱純太郎	東洋倫理學	岩井良太郎
外國經濟事情	岩井良太郎	統計學	蜷川虎三
統計學	原田鹿太郎	商行為法	本莊鐵次郎
信託法	與平定世	支那語	大平頼母
商品學	賀來俊一	佛語	加藤金次郎
商工經營論、會計學、商業演習、簿記、佛語	河村宜介	交通經濟論、經濟學演習	川上敬逸
國際公法	吉田一枝	憲法、行政法總論、行政法各論	瀧澤喜子雄
各論	武内省三	商學概論、簿記、英語經濟學研究、商業政策	武田藏之助
西洋倫理學	田邊信太郎	商業史、經濟史	海商法
商業史、經濟史	武田藏之助	破産法、債權各論、物權法	齋藤常三郎
民法總則	木村健助	取引所及市場論	佐伯三郎
商業英語	水谷揆一	獨語、農業政策	赤羽豐治郎
刑法總論、刑法各論	宮本英脩	取引所及市場論	佐伯三郎
外國為替、貿易實務論、商業財務論、商業學演習、商業數學、英語經濟學研究	三木純吉	經營經濟論	村本福松
財政學	三谷道麿	日本文化史	野村次夫
銀行論、金融論、商業學演習	森川太郎	倉庫論	魚澄惣五郎
		日本經濟史	野村次夫
		國際私法	黑正巖
		英語經濟學研究	矢口孝次郎
		國際私法	柳瀬兼助
		支那文化史	矢野仁一
		經濟原論、經濟學演習	正井敬次
		貨幣論	松岡孝兒
		債權總論	福島四郎
		國際經濟論	古屋美貞
		保險論	近藤文二
		商法總則、手形法、小切手法	安藤光
		獨語、農業政策	赤羽豐治郎
		取引所及市場論	佐伯三郎
		破産法、債權各論、物權法	齋藤常三郎
		民法總則	木村健助
		商業英語	水谷揆一
		刑法總論、刑法各論	宮本英脩
		外國為替、貿易實務論、商業財務論、商業學演習、商業數學、英語經濟學研究	三木純吉
		財政學	三谷道麿
		銀行論、金融論、商業學演習	森川太郎

大學豫科

第一大學豫科

簿記	須藤文吉	國語	飯田正一	獨語	西井克巳	獨語	堀正人	地學、地理	別枝篤彦	哲學、論理	大小島真二	英文	小川忠藏	漢文	岡本勝治	東洋史	岡本午一	英文	大平頼母	數學、自然科學	河村信一	獨語	金子又兵衛	獨語	川上敬逸	法製	田邊信太郎	心學	內藤耕次郎	獨語	村上喜貞	西史	村上數之亮	獨語	魚澄惣五郎	獨語	上道直夫	獨語	山田松太郎	獨語	安川安太郎	獨語	安田恭平	獨語	藤澤章次郎
會計監査	陶山誠太郎	英語	八鳥治一	獨語	堀正人	獨語	小川忠藏	佛語	岡本勝治	漢文	大平頼母	英文	河村信一	漢文	岡本勝治	東洋史	岡本午一	英文	大平頼母	數學、自然科學	河村信一	獨語	金子又兵衛	獨語	川上敬逸	法製	田邊信太郎	心學	內藤耕次郎	獨語	村上喜貞	西史	村上數之亮	獨語	魚澄惣五郎	獨語	上道直夫	獨語	山田松太郎	獨語	安川安太郎	獨語	安田恭平	獨語	藤澤章次郎

第二大學豫科

修身、倫理	三枝樹正道	經濟	廣瀬捨三	英語	飯田正一	獨語	八鳥治一	獨語	堀正人	獨語	小川忠藏	獨語	大坪一	獨語	岡本勝治	獨語	賀來俊一	獨語	武内省三	獨語	竹脇又一郎	獨語	谷友幸	獨語	中村友次郎	獨語	中村其之助	獨語	內藤耕次郎	獨語	村上喜貞	獨語	村上數之亮	獨語	三木治	獨語	上道直夫	獨語	魚澄惣五郎	獨語	植田重正	獨語	山田松太郎
英語	廣瀬捨三	英語	飯田正一	獨語	八鳥治一	獨語	堀正人	獨語	小川忠藏	獨語	大坪一	獨語	岡本勝治	獨語	賀來俊一	獨語	武内省三	獨語	竹脇又一郎	獨語	谷友幸	獨語	中村友次郎	獨語	中村其之助	獨語	內藤耕次郎	獨語	村上喜貞	獨語	村上數之亮	獨語	三木治	獨語	上道直夫	獨語	魚澄惣五郎	獨語	植田重正	獨語	山田松太郎		

專門部第一部

法律學科

國語	安川安太郎	英語	安田恭平	英文	藤澤章次郎	日文	福尾猛市郎	經濟	三枝樹正道	經濟	三谷友吉	經濟	水谷揆一	獨語	廣瀬捨三	獨語	杉平頓智	社會學	岩崎卯一	民事訴訟法	小野木常	獨語	奧宮精一	獨語	大隅健一郎	獨語	和田豐二	獨語	加藤金次郎	獨語	片岡甚太郎	獨語	片山正直	獨語	川上敬逸	獨語	吉田一枝	獨語	吉田貫二	獨語	武田藏之助	獨語	中谷敬壽	獨語	中西章	獨語	中村其之助	獨語	植田重正	獨語	野村次夫
國語	安川安太郎	英語	安田恭平	英文	藤澤章次郎	日文	福尾猛市郎	經濟	三枝樹正道	經濟	三谷友吉	經濟	水谷揆一	獨語	廣瀬捨三	獨語	杉平頓智	社會學	岩崎卯一	民事訴訟法	小野木常	獨語	奧宮精一	獨語	大隅健一郎	獨語	和田豐二	獨語	加藤金次郎	獨語	片岡甚太郎	獨語	片山正直	獨語	川上敬逸	獨語	吉田一枝	獨語	吉田貫二	獨語	武田藏之助	獨語	中谷敬壽	獨語	中西章	獨語	中村其之助	獨語	植田重正	獨語	野村次夫

經濟學科

商法總論、海商法、商行為、手形法、小切手法、民事訴訟法	國歲胤臣	親族法、國際私法、佛語	柳瀬兼助	債權各論	安田恭平	債權各論	山木戶克巳	債權各論	收	債權各論	福島四郎	債權各論	藤澤章次郎	支那語	有馬健之助	支那語	佐伯千仞	支那語	齋藤常三郎	破產法、和議法	三谷道麿	佛語	三谷友吉	佛語	三木治	佛語	廣瀬捨三	社會學	岩崎卯一	工業政策	磯部喜一	獨語	和宮精一	獨語	和宮豐二	獨語	加藤金次郎	獨語	川上敬逸	獨語	河村宜介	獨語	片山正直	獨語	片岡甚太郎	獨語	吉田一枝	獨語	吉田貫二	獨語	瀧澤喜子雄	獨語	中村其之助	獨語	中川庸太郎
商法總論、海商法、商行為、手形法、小切手法、民事訴訟法	國歲胤臣	親族法、國際私法、佛語	柳瀬兼助	債權各論	安田恭平	債權各論	山木戶克巳	債權各論	收	債權各論	福島四郎	債權各論	藤澤章次郎	支那語	有馬健之助	支那語	佐伯千仞	支那語	齋藤常三郎	破產法、和議法	三谷道麿	佛語	三谷友吉	佛語	三木治	佛語	廣瀬捨三	社會學	岩崎卯一	工業政策	磯部喜一	獨語	和宮精一	獨語	和宮豐二	獨語	加藤金次郎	獨語	川上敬逸	獨語	河村宜介	獨語	片山正直	獨語	片岡甚太郎	獨語	吉田一枝	獨語	吉田貫二	獨語	瀧澤喜子雄	獨語	中村其之助	獨語	中川庸太郎

心理學、論理學、哲學	中西	章
商法、合社法、手形、小切手法	國	歲胤臣
日本經濟史、經濟史、英語	矢口	孝次郎
民法總論、佛語	柳	瀨兼助
經濟原論、倫理學	正井	敬次
債權總論	福島	四郎
特殊經濟問題	古屋	美貞
論理學	藤澤	章次郎
農業經濟、經濟學史、獨語	赤羽	豐治郎
支那語	有馬	健之助
取引所市場論、英語	佐伯	三郎
統計學	菊田	太郎
商業政策、獨語	三谷	友吉
銀行爲替	三木	純吉
佛語	三木	治
財政學、社會政策	三谷	道麿
英語	廣瀨	捨三
英語	森川	太郎

高等商業學科

商業地理、東亞問題、英語、外國貿易、流外經濟事情、外國貿易、心理學、論理學、哲學	中村	長之助
法學通論	中川	庸太郎
倉庫稅關論	植田	重正
商法、合社法	野村	次夫
英語	國	歲胤臣
佛語	矢口	孝次郎
國語	柳	瀨兼助
英語	安川	安太郎
英語	安田	恭平
經濟原論、修身	正井	敬次
特殊經濟問題	藤澤	章次郎
獨語	古屋	美貞
支那語	赤羽	豐治郎
取引所市場論	有馬	健之助
統計學	佐伯	三郎
商業英語	菊田	太郎
銀行爲替	水谷	揆一
佛語	三木	純吉
珠算	三木	治
財政學	三島	律夫
獨語	三谷	道麿
農業政策、殖民政策	三谷	友吉
貨幣金融論、英語	靜田	均
銀行簿記、工業簿記、原價	森川	太郎
會計學、會計監査	須藤	文吉
	陶山	誠太郎

法律學科

物權法	入江	眞太郎
民法總則	石田	文治郎
論理學、倫理	井上	隆證
英語	八島	治一
合社法	原田	鹿太郎
論理學	西村	嘉三郎
倫理	西田	禎文
東亞問題	德永	清行
刑事訴訟法	富田	仲次郎
英語	小川	忠藏
獨語	奧宮	精一
行政各論	渡邊	宗太郎
國際公法、英語	川上	敬逸
佛語	賀來	俊一
憲法	吉田	一枝
保險法	武田	藏之助
英語	田邊	清市
行政總論	中谷	敬壽
心理學	中西	章
英語	村上	喜貞
法學通論、刑法各論	植田	重正
商法總則、商行為	野村	次夫
國際私法、親族法	柳瀨	兼助
手形法、小切手法	八木	弘
經濟原論	正井	敬次
法制史	牧	繼二
相續法	福島	四郎
經濟原論	古屋	美貞
民事訴訟法	小山	慶作
支那語	黃	廷富
海商法	安	藤光
獨語	赤羽	豐治郎

經濟學科

債權總論、債權各論	坂本	憲三
破產法、和議法	齋藤	常三郎
刑法總論	宮本	英備
佛語	三木	治
財政學、英語	三谷	道麿
英語	廣瀨	捨三
民事訴訟法	關	豐馬
法制特殊問題	末川	守博
哲學	菅	守常
英語	鈴木	富太郎
社會學	岩崎	卯一
工業政策	磯部	喜一
物權法	入江	眞太郎
特殊經濟問題	羽田	正一
論理學	西村	嘉三郎
倫理	西田	禎文
經濟原論	堀	經夫
東亞問題	德永	清行
獨語	奧宮	精一
佛語	賀來	俊一
憲法	吉田	一枝
交通論、保險論	吉川	貫二
倫理	西田	禎文
英語	角田	文雄
經濟地理、殖民政策	中村	長之助
海外經濟事情、外國貿易	中川	庸太郎
心理學	中西	章
政治學	長濱	政壽
債權總論	宇佐	美正祐
商法、合社法	國	歲胤臣

經濟史、日本經濟史	矢口孝次郎	民法總則	柳瀨兼助	支那語	黃廷富	農業經濟、經濟學史	赤羽豐治郎	取引所市場論、英語	安藤光	統計學	佐伯三郎	財政學、社會政策	菊田太郎	銀行爲替	三谷道慶	商業政策	三木純吉	佛語	三谷友吉	廣瀬拾三	貨幣金融論、英語	森川太郎	哲學	菅守常	英語	杉平顯智	工業政策	磯部喜一	漢文	一海景宥	論理學	井上隆證	物權法	入江眞太郎	英語	八島治一	商法	原田鹿太郎	商業英語、銀行簿記、英語	西村勝太郎	論理學	西村嘉三郎	倫理	西田禎文	英語	小川忠藏	東亞問題	德永清行	獨語	奧宮精一	民法總則	和田豐一	經營學	加藤金次郎
-----------	-------	------	------	-----	-----	-----------	-------	-----------	-----	-----	------	----------	------	------	------	------	------	----	------	------	----------	------	----	-----	----	------	------	------	----	------	-----	------	-----	-------	----	------	----	-------	--------------	-------	-----	-------	----	------	----	------	------	------	----	------	------	------	-----	-------

商業學科

交通論	河村宜介	商品學	河村信一	佛語	賀來俊一	保險論	神宅賀壽惠	商業通論、商業政策	吉川貫二	保險法	瀧澤喜子雄	商業地理	瀧谷善一	海外經濟事情、英語、外國貿易	中川良之助	心理學	中川庸太郎	債權總論	村上喜貞	法學通論	宇佐美正祐	倉庫稅關論	植田重正	經濟原論	野村次夫	特殊經濟問題	丸谷喜市	商業數學	後藤新之助	支那語	黃廷富	手形法、小切手法	安藤光	商業史、取引所市場論	佐伯三郎	會計學、商業簿記、會計監査	木村禎楠	佛語	三谷道慶	銀行爲替	三木純吉	商業英語	三谷友吉	商業政策	森川政造	貨幣金融論	森川太郎	哲學	菅守常	工業簿記、原價計算	須藤文吉	英語	鈴木富太郎
-----	------	-----	------	----	------	-----	-------	-----------	------	-----	-------	------	------	----------------	-------	-----	-------	------	------	------	-------	-------	------	------	------	--------	------	------	-------	-----	-----	----------	-----	------------	------	---------------	------	----	------	------	------	------	------	------	------	-------	------	----	-----	-----------	------	----	-------

國語漢文專攻科

國民道德、實踐倫理	飯田正一	國語	一海景宥	論理學	井上隆證	東洋史	石濱純太郎	西洋史	今川太郎	漢文	西井克巳	漢文、漢作文	土橋文夫	論理學	茶谷忠治	漢文	岡本勝治郎	經濟原論	小川忠藏	英語	河村宜介	英語	片岡甚太郎	法制史、憲法	吉田一枝	國語	吉田庄太郎	國語	吉澤義則	國語	高橋盛孝	國語	田中健三	心理學	中西章	法學通論	植田重正	國語	山田松太郎	國語、文學概論、國文學	安川安太郎	國語	藤澤章次郎	有嚴故實、國史	江馬務	倫理學、教育學、教授法	三枝樹正道	國語	廣瀬拾三	國語	菅守常	飯田正一
-----------	------	----	------	-----	------	-----	-------	-----	------	----	------	--------	------	-----	------	----	-------	------	------	----	------	----	-------	--------	------	----	-------	----	------	----	------	----	------	-----	-----	------	------	----	-------	-------------	-------	----	-------	---------	-----	-------------	-------	----	------	----	-----	------

英語專攻科

國民道德、實踐倫理	一海景宥	論理學	井上隆證	東洋史	石濱純太郎	西洋史	八島治一	英語	西井克巳	英語	細江逸記	論理學、獨語	大島眞二	文學概論	大坪一	英作文	小川忠藏	經濟原論	河村宜介	佛語	賀來俊一	英語、英文學史	片岡甚太郎	法制史、憲法	角田文雄	國語	吉田一枝	國語	高橋盛孝	國語	田中健三	心理學	中西章	法學通論	植田重正	國語	村上喜貞	英語、英文法	山田松太郎	國語	安田恭平	國語	安川安太郎	倫理學、教育學、教授法	江馬務	國語	三枝樹正道	獨語、哲學	菅守常	鈴木富太郎
-----------	------	-----	------	-----	-------	-----	------	----	------	----	------	--------	------	------	-----	-----	------	------	------	----	------	---------	-------	--------	------	----	------	----	------	----	------	-----	-----	------	------	----	------	--------	-------	----	------	----	-------	-------------	-----	----	-------	-------	-----	-------



大學の動向

江里口春志

▽……………

最近鬱勃として表はれる傾向に「學制改革の問題」がある。新體制の根本義が高度國防國家の建設にありとすれば學制特に大學の方向もこの意味に於て自ら定まるのである。

そこで先づ前程として考へられるものに「大學教育の再檢討」といふ問題がある。誰でも従來からのしきたりの大學教育がこれでよいとは云はれないであらう。然らば何處に再檢討さるべき矛盾を持し來つてゐるか。

大學令第一條に「大學ハ國家ニ須要ナル學術ノ理論及ビ應用を教授シ並ニ蘊奥ヲ攻究スルヲ以テ目的トシ兼テ人格ノ陶冶及國家理想ノ涵養ニ留意スベキモノトス」とあるを讀むならば大學教育の目的が何れにあるかは自ら明かである。ところで革新すると云つても授業時間の短縮振り替へによる鍛鍊時間の増加、健康増進運動などの如き枝葉末節的な改革であつてはならない。否それのみに拘泥してゐるべき時ではあるまい。進んで大學の

矛盾の根本義を糾明變革すべきでなければならぬ。

▽……………

次に主たる試案を二三列挙して見やう、教育の情熱——學問の源泉である。

こゝでは教授團が之に該當する——この問題こそ大學教育刷新の大本に値ひするといつても過言ではない。具體的事象としても百年一日の如き古いノートのみでは駄目だ。

ロ、學園生活の問題——これは學校と學生團、教授と學生との繋りが緊密でなければならぬといふ事である。教授は學校所定の時間制に従つて講義する。學生は之を克明にノートして歸つてしまふ。試験になるとノートのみでやつとパスする。之では大學教育はあまりにも無味乾燥で、人格向上など思ひもよらぬ事である。

然らば如何にすれば良いか。それには先づ教授自身の學的充實を期する事であり、教授と學生との接觸を滑らかにする教授が學生に接するには一面最も嚴肅に他面頗る温情でなければならぬ。學生

が教授に對するには一面父兄に對する様な親しみをもち、他面飽くまでも師に對する禮讓を守らねばならぬ。かくして上下和親協力の精神の上に充分の節制を保つことが出来るのである。

▽……………

次に私學と官學の問題が考へられる。新聞紙の傳ふところによれば「私學合同の問題」がある。「早稻田、慶應は之を存続し、其他の在京私大を打つて一丸とし甲大學は文學部、乙大學は法學部、丙大學は商學部、丁、戊、己それらの各學部とする。醫學部は慈惠大と日本醫大を合併して之に當てる」といふのである。果して米屋や炭屋の合同會社の如くにうまく行くものであらうか。夫々の大學には何れも過去何十年の長い歴史によつてそれ／＼同じ難い學風がある。殊に私學には私學としての特色があるに於てをやである。

國家から何等の補助も後援も受けない私學が、何れも今日の大を成し發展した所以のものは、出身者から成り立つ同窓會員の熱烈なる不斷の支持があるのである。これこそ官學には夢にも見る事の出來ない私學のみが占有する、特長であり、誇りである。

▽……………

「官學私學の差別待遇」の傾向は新體制下の今日に於ても依然として輝いてゐる。現代に於て官學のみが時を得顔に振舞ひ得るといふ理窟は成り立たないのである。過去からの趨勢として私學に人材がないとすれば、文政當局はこの具體策として無能教職員の罷免、有能の士の拔擢を私學當局に從憑すべきである。然し乍ら私學では位階勲等、恩給などの官儀的恩恵はあり得べくもない。そんな事では有能の材は集め得る事は不可能であるとすれば、官學に劣らぬ優遇の道を起して陣容を建てしむるべく私學當局に進言すべきである。

▽……………

研究上に就いても同様の事が云へる。官學と私學とは外觀の美醜、規模の大小は云はずもがな、その設備に於ても研究費に於ても誠に天地霄壤の差がある。そうした相異の隔絶した私學から生れる業績が、よくもやつたと感心させられる事が屢々である。「學問の研究何ぞ學舎の輪奐の美に光被せらるべけんや」と云ひたいところである。

私學當局は當然一般より愛護を受くべきである。就中文政當局はそこに於て研究にいそしむ學徒をも少し勞り勵ます可きである。私學といふ繩子扱ひは絶対に不可である。——筆者は昭九大法卒、醫學博士、江里口病院長——

校 友 會 費 拂 込 者 氏 名 (其 二)

一 時 拂

伊 東 健

昭 和 十 六 七 八 九 年 度 會 費

水 谷 清 示

昭 和 十 六 七 八 年 度 會 費

吉 木 由 雄 木 下 林 三 郎

昭 和 十 六 七 年 度 會 費

野 田 義 人 王 垣 內 行 雄

昭 和 十 六 年 度 會 費

柴 山 英 二 郎 錦 保 一 高 橋 豐 治 森 本 三 一 郎

橫 山 孝 美 神 澤 桓 夫 山 本 利 一 篠 井 芳 助

紀 戶 直 輝 藤 原 健 治 白 川 義 雄 阪 口 正 一 郎

青 戶 正 博 高 橋 信 忠 鎌 倉 武 之 助 森 高

谷 原 保 原 田 勝 南 部 清 和 池 田 信 一

大 里 喜 孝 棚 瀨 純 時 水 保 雄 城 谷 春 義

內 田 正 吉 本 福 治 森 田 義 雄 松 原 泰 興

森 信 一 森 口 博 雄 中 谷 定 夫 村 山 早 苗

田 中 功 小 崎 茂 美 佐 藤 義 博 南 富 雄

佐 倉 弘 一 伊 藤 幸 八 大 山 純 一 神 谷 清

大 河 原 尚 宮 前 邦 雄 山 田 耕 一 奧 野 幸 吉

森 香 加 藤 市 郎 小 川 順 松 田 敏 夫

元 谷 辰 間 森 大 三 郎 鈴 木 謙 二 高 崎 信 行

吉 田 善 彦 高 砂 治 中 場 力 三 郎 高 村 義 光

朝 垣 榮 二 岡 本 一 難 波 泰 三 中 西 正 明

平 田 嘉 男 黑 田 貞 雄 渡 部 輝 二 植 村 武 夫

免 出 勝 己 石 塚 年 田 村 寅 生 山 本 一 夫

水 野 忠 義 能 世 元 由 森 川 亨 藤 林 彰 一

井 內 恒 夫 內 藤 鎮 界 西 方 才 智 大 島 武 夫

山 本 正 信 姜 延 秀 奧 田 博 宇 田 良 治

町 田 翠 小 椋 利 夫 馬 場 宏 上 中 正 儀

湯 淺 直 行 利 根 川 良 彦 井 上 雄 二 淺 尾 辰 雄 越 智 勇 大 塚 泰 助 大 西 實 次 大 田 孝

望 月 保 彦 新 名 武 男 高 橋 忠 治 正 木 俊 一 大 田 光 治 岡 井 泰 雄 岡 田 康 岡 野 悅 雄

安 並 正 夫 堂 浦 千 里 宮 本 貞 己 谷 口 秋 雄 岡 邊 勳 落 合 昇 加 藤 保 英 陰 山 重 一

土 井 善 一 平 山 和 男 北 牧 泰 三 牧 野 雅 男 片 岡 恕 梶 原 弘 太 兼 勇 樺 島 光 次

立 川 道 雄 栗 林 平 吉 木 通 重 晴 平 松 真 一 川 崎 道 夫 菊 池 一 雄 菊 池 謙 三 日 下 明

忠 平 長 治 郎 樋 口 悅 造 梅 田 忠 夫 山 田 進 倉 內 芳 雄 吳 健 一 桑 田 長 作 五 島 守

前 川 正 行 坪 內 完 一 德 田 重 義 八 田 巖 藏 小 林 淳 二 齋 藤 猛 阪 本 廣 司 坂 山 重 達

酒 原 隆 雄 尾 山 光 三 郎 金 澤 精 治 成 瀨 優 笹 井 英 夫 笹 山 幸 一 島 崎 隆 夫 芝 野 貞 行

羽 田 榮 一 西 岡 正 司 冰 室 忠 男 溝 江 正 太 郎 柴 田 忠 男 下 井 六 郎 菅 沼 界 雄 畝 川 穎 一

岡 嶋 省 三 福 田 勇 秋 吉 文 夫 吉 田 秋 四 郎 田 中 一 郎 田 中 喜 久 藏 田 中 次 豐 田 中 利 一

富 山 正 信 浦 谷 武 男 島 田 惠 弘 金 丸 毅 田 邊 喜 隆 田 村 信 義 高 垣 五 郎 高 鳴 秀 明

溝 淵 國 治 村 中 豐 彦 橫 山 季 光 福 田 敏 夫 高 野 保 雄 瀧 野 泰 三 竹 內 德 次 郎 竹 下 文 雄

工 藤 義 正 島 谷 吳 夫 木 村 昌 治 橫 原 富 雄 竹 嶋 和 夫 玉 井 久 藏 近 木 富 藏 辻 忠

荒 川 虎 一 郎 鷗 飼 慶 一 中 條 得 一 林 隆 之 辻 順 次 弟 子 丸 寬 土 居 康 成 富 田 龍 己

矢 野 國 臣 筒 井 國 義 飯 盛 秀 心 南 章 太 郎 苗 村 德 五 郎 中 瀨 正 雄 中 塚 光 夫 中 野 敏 夫

池 田 保 美 橋 本 種 治 大 原 英 治 良 松 本 清 中 野 文 吉 中 村 平 治 郎 內 藤 英 雄 永 延 克 義

尾 坂 照 雄 中 川 貴 義 奧 田 嘉 三 荒 川 勇 長 尾 德 大 郎 長 崎 實 長 島 弘 西 井 清

長 岡 實 山 本 祥 市 新 田 利 男 村 中 新 一 西 田 肇 二 西 田 洋 一 西 田 勇 治 西 谷 輝 久

徑 原 實 砂 田 義 秋 賴 光 密 夫 土 岐 友 市 西 村 公 利 西 村 日 吉 野 口 大 二 郎 野 崎 隆 雄

合 田 實 夫 前 田 逸 治 石 井 昊 山 本 博 亮 濱 田 利 雄 林 寬 平 井 甚 四 郎 平 尾 績

鈴 木 平 吉 木 村 滋 山 本 良 之 萩 原 敏 雄 延 原 四 郎 延 原 金 雄 灰 井 正 二 初 瀨 川 利 雄

今 井 隆 久 大 山 肇 古 井 三 治 田 中 隆 雄 深 尾 弘 藤 井 三 男 藤 田 貫 次 藤 原 龜 夫

杉 谷 繁 義 大 瀨 壽 一 橋 本 康 口 村 正 二 藤 本 清 古 山 草 樹 本 田 浩 幸 眞 期 隆 次

岩 畔 保 北 村 學 高 野 良 夫 北 村 利 一 松 下 雅 真 松 本 敬 治 的 場 三 郎 三 浦 義 一

平 野 國 正 小 坂 福 雄 狹 間 宏 足 立 己 喜 夫 安 藤 智 惟 宮 村 利 雄 宮 本 嘉 藏 宮 本 達 雨 村 山 正 純

藤 本 弘 安 藤 直 宏 足 立 己 喜 夫 井 道 正 文 名 劍 要 一 森 井 庄 一 森 井 隆 三 森 川 健 二 郎

雨 宮 久 東 一 夫 五 十 川 勝 井 道 正 文 八 尾 壯 比 古 養 父 一 郎 矢 部 一 疋 山 內 喜 八 良

井 村 悅 三 井 本 清 光 伊 藤 忠 雄 伊 藤 正 紀 池 永 正 德 山 川 孝 山 口 隆 清 山 口 春 一 山 口 正 夫

揖 斐 末 入 家 所 一 郎 生 野 次 郎 池 永 正 德 山 下 勇 次 山 田 一 男 山 本 貞 之 助 指 吸 千 之 助

池 邊 勝 三 郎 石 井 誠 石 田 久 一 石 津 勉 治 吉 田 兼 寬 吉 田 毅 吉 野 慶 三 渡 邊 朗

市 川 典 夫 稻 野 治 兵 衛 今 井 盛 五 岩 本 鍾 隣 渡 邊 巖 (以 下 次 號)

上 田 幾 久 男 牛 尾 正 人 小 野 元 亮 尾 崎 林 藏 吉 野 慶 三 渡 邊 朗

關西大學
教授

森川太郎著

A列5判
下價三三〇
二四〇

銀行職能論

◇經濟特殊研究叢書第八編◇

經濟に對して銀行の營む職能を明確ならしむることは、即ち今日に於ける金融經濟の動きの核心を把握することである。本書は、著者が數年に亘る勞作を通じ、此課題に決定的答解を與へんとし、て成りしもの、金融理論の異說多き諸問題は、茲に整然と解舒せられて餘蘊無きに近い。確かに金融乃至經濟理論に對する一つの新しき寄與たると同時に、通貨、貯蓄、物價、生産力擴充等我國現下の實際的諸問題に對しても亦、含蓄と示唆に富む好著たるを失はぬであらう。

最新刊

神戸商大教授
經濟學博士

丸谷喜市著

A列5判
下價三〇〇
四〇〇

價值及價格研究

◇經濟特殊研究叢書第九編◇

著者の言葉——經濟者と經濟學者との心はいま専ら政策乃至實踐の問題に向けられてゐる。時代の潮が極めて急速かつ雄大に動くとき、之は當然のことと思ふ。それにつけても基礎的、理論的研究は一日も忽にすべきではなす。私見に依れば經濟諸現象の根本的解明は「主觀主義」に立脚することに依つて初めて可能である。但し主觀學派の成し遂げたことは實はただアルファであつて決してオメガではない。之を経験科學の體系にまで築き上げることが我々に殘された課題ではないかと思ふ。

最新刊

昭和十六年五月十五日發行 關西大學學報第百八十九號

東京駿河臺中央大學前
振替東京一八二一三八番
電話神田二二二八番

株式會社
大同書院

大阪區北區
大替振
電話
三六一五
一六七五
九六五
七五五
新田道
二二二番